

<追悼文>山口不二雄先生のご逝去を悼む

中俣, 均 / NAKAMATA, Hitoshi

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

47

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

6

(発行年 / Year)

2015-03

— 追悼文 —

山口不二雄先生のご逝去を悼む

中俣 均

訃報

2014年2月のある日。入学試験の採点を終えて疲れ切ったまま新幹線に乗り込み、ウトウトしていたところに、突然同僚の片岡義晴さんから電話があって、山口不二雄先生のご逝去のことを知らされた。呆然としたままその日は帰路について、そのあと、とくに21世紀に入ってから山口さん（と、いつもそうだったようにここでも呼ばせてもらうことにする）が法政を退職された2006年3月までの、今思えば法政大学地理学科の激動期とも言えるべき期間に起こったあれこれのことが断片的に思い出され、この1年近くがあつという間に過ぎ去った。衝撃的というほかはない亡くなり方（これは詳述しない）も含めて、山口さんの心中を察すると、悲しみは日に日に募るばかりである。そういえば、渡邊一夫先生の訃報を聞いたのも、ちょうど1年前の2013年2月、入試の採点室でのことであった。入学試験の採点などという人間的ならぬ所業に精を出した者への報いに違いない。

2014年の夏休みに入る直前、本誌編集長の細田浩先生に、山口さんの追悼文を記すよう命ぜられたものの、すぐにお引き受けするのはためらわれた。理由はいくつもあった。一つに、（と、こう並べて書くのが山口さんの書き癖だった！）本誌の読者はよくご存じのとおり、山口さんと私とは、同じ人文地理学といってもずいぶん専攻分野が隔たっている。若き頃から、経済地理学の新旗手現わると評された山口さんの、学問的な業績を正しく語る資格も能力も、だから私は持ち合わせてはいない。研究者としての山口さんを語るべき適任者は他にいないはずだし、しかるべき方にぜひ、山口さんの成し遂げた仕事を語ってもらいたいと思ったからである。二つに、同じ大学の出身とはいえ、卒業した学部が違う。同じ地理学の専攻コースではあっても、カリキュラムも違うし教室の雰囲気も違う。確かに私たちの時代は、二つの学部から学生が大学院に進学するときは“合流”することになっていたのだけれど、私が“入院”した年（1976年4月）には、山口さんは博士課程を終えたその年に、それも20歳台という若さで法政に専任講師としてスカウトされたという、まさに伝説の人だった。（しかも法政への就職は、博士課



山口さんは、写真を撮るのは大好きだったが、写されるのは大嫌いだった。記念写真を撮影する機会があつても、いつも巧妙にその場から逃れていた印象がある。その山口さんの、珍しいスナップ写真が、本稿に記した『空と風の高原人—みねのはらペンション村の40年—』の中にあつた。それをここに転載させてもらう。

程2年目のときに、つまり実際に就職される2年前にすでに決まっていたということだった。)だから、スゴイ人だとのうわさはよく聞かされたものの、個人的な接触はそのころはまだなく、机を並べて一緒に同じ空気の下で勉強するという時期を私は持てなかった。制度的には先輩-後輩の間柄であっても、実際に直接面と向かって話をする機会も、たぶん私が法政に着任するまではなかったと記憶する。学生・院生時代の山口さん（の人と学問）をもっとよく知る人は必ずいるはずで、そういう方こそ山口さんを語る資格をお持ちなのではないか。三つに…と挙げていくとまだまだありそうだ。しかし、それらの事情のすべてを打ち払って、いまこうして山口さんのことを偲びつつおこがましくも拙文を綴っているのは、山口不二雄という類いまれな地理学者が、法政大学文学部の地理学科に30年間の長きにわたって確かに在職したこと、その間に研究者として、また教育者として、そして何よりも一人の自由人として、文字通り縦横無尽に“生きた”ことを、できるだけたくさんの方々の記憶にとどめておいていただきたいとの出過ぎた想いを禁じ得なかったためである。それが、同じ人文地理学専攻の学徒として、彼の生き方を22年間同僚として見続けてきた者

の、ある種の義務ではないかと考えたからである。なんと大げさな、と泉下からの声が聞こえてきそうだが…。というわけで、よくあるお定まりの追悼文は書けそうもないから、主に私の個人的な哀悼の意をここに書き表わすことをお許しいただきたい。

法政大学の学風は、自由と進歩であるという。私は大学の学風などというものの存在をほとんど信用しない不屈き千万な人間であるが、そんなひねくれ者の眼からみても、山口さんは、法政大学文学部地理学科という舞台において、終始、まさに自由と進歩を全身全霊で体現し舞い続けた人だった、というのが結論である。

略 歴

いま私の手元にある「地理学科のしおり」(1991年版)の自己紹介文によると、山口さんは「1947年1月24日に父母の郷里、宮城県桃生郡桃生町新田(現石巻市)で生まれた。1歳にならずして東京に戻り、大学院修士課程を終えるまでを杉並区阿佐ヶ谷で暮らす」とある。当時、日比谷高校と並ぶ難関進学校であった都立西高校から東京大学文科三類入学。教養学部教養学科人文地理学学科を経て、東京大学大学院理学系研究科地理学専攻課程に進まれた。博士課程の満期を迎えて直ちに、法政大学文学部地理学科に就職されたのは、先に述べたとおりである。第二次大戦後の日本の(人文)地理学を、経済地理学の視点から革新し再構築しようという気構えで出発した俊秀たち第一世代の、一つの大きな牙城であった法政大学の地理学科を、次世代として引き継ぐ使命を囑望されたのだった。その期待にこたえるかのように、1979年4月に助教授、1986年4月には教授に昇進された。

同じ「地理学科のしおり」にはまた、「…昔から地理が好きでかつ「鉄ちゃん」(鉄道マニアの尊称)であった。地図や時刻表を見るのが好きだったし、ノートに余白に適当な海岸線と等高線を引いて自分の島を作り、その上に鉄道や道路・ダムや市街地の建設を計画するという遊びをよくやった。ささやかな庭に山を作り、川を掘り、ダムを作って水を流してはよく叱られた。近くにまだ残っていた水田や雑木林で遊び、休みには父親に連れられて郊外の山に登り虫を捕った。花壇作りに凝ったこともあった。…」とも語っているから、長じて地理学者となる人にはかなり共通するところの多い幼少期をおくったものと推察される。

著 作

山口さんの著作の主なものを、以下に掲げる。下記のうち、a)～s)は山口さん自身が文学部シラバスの教員自己紹介の欄に記載していたもの(e)～g)の執筆部分の詳細は筆者が追加)で、t)とu)は筆者が付け加えたものである。これらのほかにも発表されたものはあって、見落とされているかもしれないことをお断りしておく。研究者としての仕事は、おそらくu)が最後になったのではないだろうか。

- a) (1973) : 日本における生乳の生産配置の検討. 経済地理学年報 19-1.
- b) (1975) : 主産地形成論の継承と展開. 経済地理学年報 21-2.
- c) (1976) : 賃金・所得の「地域格差」について. 法政大学文学部紀要 21.
- d) (1977) : 戦後日本資本主義における工業配置の諸類型について. 法政大学地理学集報 6.
- e) (1978) : 『日本農業の地域構造—日本の地域構造3』(大明堂)
長岡顕・中藤康俊と共編。第1章2節(課題と方法), 第2章3節(農家経営の地帯構成の形成), 第3章第1節(農家労働力), 第4章第3節(野菜), 同第7節(酪農), 同第8節(農業諸部門の生産配置と市場の地域構造), 第5章第2節(農業の生産配置と流通の地域構造)執筆。
- f) (1979) : 『人口流動の地域構造—日本の地域構造5』(大明堂)
伊藤達也・内藤博夫と共編。第1章第1節(本書の課題と方法), 第2章第2節(人口の広域移動), 第4章第1節2-2)(大学卒業生), 同第2節1(農家労働力の移動)・5(ホワイトカラーの転勤移動—その3)と4), 同第3節(人口の広域移動とライフステージ・職業), 第6章第1節(人口流動の諸形態), 同第2節1)(人口の広域移動の諸形態)執筆。
- g) (1979) : 『流通・情報の地域構造—日本の地域構造4』(大明堂)
第3章第1節(小売業)執筆。
- h) (1980) : 地域概念と地域構造概念(1)・(2). 地域(大明堂)4・5号.
- i) (1982) : 電気機械工場の地方分散と地域的生産体系. 経済地理学年報 28-1.

- j) (1983) : 立地論ノート—経済地理学における立地論の評価一. 法政大学文学部紀要 28.
- k) (1985) : 福島横編メリヤス産地の構造. 法政地理13.
- l) (1986) : 商業的農業の多面的展開. 藤岡謙二郎監修『新日本地誌ゼミナール 関東』(大明堂) 所収.
- m) (1986) : 商業・サービス業の地域構造の形成と変動. 川島哲郎編『総観地理学講座13 経済地理学』(朝倉書店) 所収.
- n) (1990) : 田舎暮らしの文化論. 法政通信10月号 (法政大学通信教育部).
- o) (1991) : 花も団子も一北面のカタクリ一. 法政通信 4月号 (法政大学通信教育部).
- p) (1992) : 『地理調査法 (人文編)』法政大学通信教育部.
- q) (1994) : 永遠の経済地理学ノート—鴨澤地理学の評価と継承視点一』法政地理 22.
- r) (1994) : 地理学と現代—D.ハーヴェイの軌跡と現代地理学の展望一. 法政大学文学部紀要40.
- s) (2001) : 宮城県登米町における「スレート屋根景観」の形成と保存 (第 1 報). 法政大学文学部紀要46.
- t) (2005) : 「花観光」と町おこし. 地理 (古今書院) 50-9.
- u) (2009) : 根子岳風力発電計画と地域の人びと. 地理53-8.

『』は著書, それがないものは論文 (またはエッセイ) である。このリストを見ていると, 20~30 歳台の山口さんの関心が, 経済地理学の非常に幅広い分野に対して及んでいたことがわかる。正統派の経済地理学者が少しずつ変身を見せ始めるのは, 私見では1990年代に入ってからのことと推察される。もともと文科系でありながら, 高校時代に生物部, 大学時代も生物学研究会に属し, 花や昆虫や鳥類に関心を持ち続け自然環境に親しむ人でもあった。「地理学科のしおり」には, ご自身の学問的遍歴を, 次のように記している。「卒業論文は酪農を取り上げ, 長野県諏訪・伊那地方の実態調査を行った。植物と動物が出てくる食物連鎖的面白さから出発したが, 調査を重ねる中で経済的要因の重要性を農民から教えられた。産地調

査のテクニックを応用してさらに研究対象を地場産業産地まで広げ, 次いで工業立地論, 商業立地論と発展させてきたが, 経済地理学にあまりにも傾斜し過ぎたとの反省から, 最近では文化の問題, 環境の問題などにも再び興味を持っている。」こうして, 法政を辞められる直前の文学部シラバスの「専攻分野」欄には, 「経済地理学 (農業, 工業, 商業, 人口地理), カウンターカルチャー論 (環境運動, 自然保護運動, 伝統技術や町並みの保存運動など), 社会経済地誌」と多彩な分野への関心を表明するようになっていた。

世の中を広く見ること。そして, 人間を含めたあらゆる生物が生きて暮らす世界に, その中においてそこを楽しみそれと一体化する自分を見出す, というのが山口さんの学問の本願だったのではないだろうか。

献 身

山口さんを間近で見ていると, これはとても自分には真似できないと思ったのは, 学生や院生との付き合い方である。懇切というか公平無私というか, とにかくよく時間をさいて, 学生たちと食事に行ったり, アルコールはほとんど嗜まない人だったので, お茶を飲みに行ったりしていた。神楽坂入口の甘味処「紀の善」などがご最頂だった。

それは, 子分を引き連れて…などという権威を笠にきた風情とは全く違っていった。そういうことからもっとも遠いところに行ったのが, 山口さんである。おそらく毎回, 懇切な学生指導, 個人面談が, 気楽に話せる場で男女を問わない複数の学生らを相手に, 指導だと相手には思わせられないような形で, 行なわれていたのだろう。山口さんは, 個々の学生が直面している困難や悩み, 本人を取り巻く諸事情などに, おそろしく精通していた。その上でのアドバイスであってこそ, 真に学生が自主的に学ぶ意欲をかきたてることに裨益するという教育的信念だったのだと思う。その信念は, 単に自分の, 例えば卒論指導担当学生だけに限ったことではなく, どの学生に対しても同じように貫かれていた。男子学生よりも, 女子学生に甘い, とは本人も公言していたが, それも, 社会に出たとき男性に比して埋もれがちな女性の潜在能力を, できるだけ学生時代に開花させてほしいという心持ちからのことだったのではないかと。彼ら, 彼女らのために, 山口さんが費やした時間と費用は, いったいいかばかりだったのだろうか, いまでも想像する。サービス精神に富んだ生来のリーダー的性

格は、法政での組合委員長を引き受けたり学部執行部の一員に加わったりしたところにもうかがえたが、それが最も発揮されたのが、学生との付き合いにおいてだった。30歳台から40歳代は、頼れる兄貴であり、50歳台になるとそれが慈父のまなざしに変わっていった。「真似できない」と思ったのは、そうした熱情だった。卒業しても山口さんを慕う元学生たちは数多くいた。とくに女子学生には人気があった。

だからこそ山口さんは、教員の学生への評価に、教員個人の嗜好が混じったりすることを嫌った。卒論審査の席などで、自分の意に沿わない学生への評価—甘い場合も、また辛すぎる場合も—を平気でくださる教員には、顔をしかめたものだった。さらに、彼が忌避していたのは、教員が学生を「囲い込む」ことだった。自分の指導学生であっても、例えばその学生の卒論のテーマについてもっと詳しい教員（学内外を問わず）がいたら、積極的に話を聞きに行くよう勧めた。同時に、ほかの教員の指導学生がアドバイスを求めてきたら、分け隔てなく自分の指導学生と同じかそれ以上に懇切丁寧に、助言を与えていた。私の指導担当だった学生に、そうした者が相当数いたからそのことがよくわかる。それで救われた学生もたくさんいたはずである。山口さんは、とことん（これも彼がよく使った言葉だった）法政の学生たちの底力を信じていたのである。

病魔

そんな山口さんを、ちょうど50歳になる目前に病魔が襲った。舌癌だった。1996年の夏、横浜の病院に入院中の山口さんを、ご本人の拒絶を無視して見舞ったことがある。舌の病巣を切り取り、そこに足の皮膚（？）の一部を移植するとかいう大手術をすませたばかりだった。手術直後の発話の不自由さは、ご退院後のたぶん苦しいトレーニングなどもあってのことと思われるが、少しずつ回復していった。しかしそれでも、話すことの不自由さは、傍目で見えていても察するに余りあるものだった。発病されたときに在籍していた学生たちは、事情がわかるからまだ理解してくれたようだ。しかし、年月がたつにつれて事情を知らない学生がふえてくる。そうした学生たちから、授業が聞き取りにくいなどという声も漏れ始めたりした。山口さんはさぞ辛かったことであろう。

2003年2月、山口さんが最も敬愛し私淑していた鴨澤巖さんが亡くなられたとき、ご葬儀の席で

同僚としての弔辞を読まれるのは山口さんの役目だと、誰もが思っていたに違いない。山口さん自身も、そう思いそうしたかたはずである。だが結局、山口さんはそれを固辞し、私にその役を「押し付け」られた。発話に難が残ったことは、それほど彼をナーバスにさせていたものと思われる。これまで述べてきた、権威を笠に着ないこと、女子学生に甘いこと、学生の「囲い込み」を嫌ったことは、いずれも実は、鴨澤さんを追悼する小冊子に書かれた文章の中で、鴨澤さんがそういう方だったと山口さん自身が回顧していた点でもある^{註1)}。

山口さんの法政大学在職は、1976年4月1日から2006年3月31日まで、ぴったり30年間だった。病気のこともあって（と私は推察した）、何かあると「辞めるやめる」（もちろん法政を）と言うようになったのは、実際にお辞めになる数年前からのことで、私などはときにそうした物言いには正直、首を傾げたりしたものだった。その一方で、まさか本気ではあるまいと高をくくってもいた。本当に辞めると言い渡されたのは2005年の夏ごろだったと記憶する。私もあわてて、なんとか思いとどまってくれるよう何度かお願いもしてみたのだが、すでに決心は固かった。病気のためではない、残りの人生を、本当にやりたいことに費やしたいからだ、と言われては、翻意も難しいと思うしかなかった。とはいえ、実際に辞める決心をされるきっかけになった本当の理由は、別のところにあるとも私は確信している。もっとも、先の「地理学科のしおり」の1991年版には、すでに「今一番考えていること」として、「10年たったら仕事をやめて北海道に移住したい」と書いている。のちにはその「移住先」候補が、北海道から長野県に代わるのであるが…。だから、ちょうど30年勤めあげて法政を退職されたのは、決して単なる気まぐれからではなかったのだろうけれど。

21世紀に入ってからの法政・地理の激動期、と先に書いた。時が移りスタッフの構成も変わって、すでに地理学科は、かつて山口さんがこよなく愛したような自由闊達な雰囲気にも満ちた場所ではなくなり始めていた。何よりも時代の要請が、大学という場を余裕のない無機質な空間に変えていった。もう自分がいるべき場所ではない—そんな思いが彼の辞職の意思を後押ししたような気がしてならない。鈍感な私でさえ、似たような思いを感じ始めていたのだから。

再 起

時は少し前後するが、病気を克服して大学に復帰してからの山口さんは、以前に増して花を探し鳥を撮りキノコを食しというように、自然とより関わる度合いを深めていった。学期中でも少し暇ができると、あのブランド物のリュックを背負ってぶらりとあちこちに出かけることが増えていった。カタクリの自生地を探して新潟県の日本海側にある角田山に行ってきた、などと旅から帰ったあとで聞かされたことがある。拙寓近くの長岡市悠久山あたりにも、足を運ばれたことがあったらしい。

そんな山口さんが、法政の通信教育部テキスト『地理調査法（人文編）』を書きあげたのは発病前だったが、そこである種の「快感？」を覚えたのだろうか、次に『人文地理学概論』のテキストを仕上げるのだと言い出した。目次構想を具体的に練り、それを何回も改訂し、まえがき（1万7000字にもほぼる）だけは書き終えている。そのたびに、私たちにそれを見せたのは、自らをのっぴきならない状況に置くことによって、仕事を進めようとの魂胆だったようである。次ページに紹介するのは、最後の改訂版構想である。

これだけ書いたらA-5判数百ページの教科書にもなるかというボリュームで、経済地理学に足場を置きながらも、自然地理学とか自然史とかいった文字が頻出することや、地誌への「回帰」を意図的に行おうとしていること、地域政策としての町づくりや地理教育への目配りといった、40歳代後半以降の山口さんの学的関心のありようが系統立てられている。率直に言って、この内容のテキストが完成したとして、それを学生が読みこなせるかどうかには疑義を呈せざるを得ないけれど、山口さんの意欲はよく伝わってくる。自分なりの地理学を構築するのだという気概が表れている。日付からみて、法政を辞める決心をされたあとの構想であり、彼の「やる気」を見落としてはならないと思う。

公務から解放された山口さんを待っていたのは、新しい生活だった。長津田のアパートに本拠を置き、そこと長野県須坂市のペンションとの間をしばしば往復する暮らしを始めたこと聞いた。退職金でその峰の原高原のペンション村に、自分の図書館を建てるのだ、と張り切っていた。それなのに…。

手 紙

山口さんは手紙魔だった。紛糾した学科会議の後など、二、三日すると分厚い封書一便箋7～8枚にピッシリと、あの横書き連綿体の、とても読みやすいとはいえない文字が埋まっていることもあった一が幾度も届いたりした。メンバー間の意見の相違についての情勢分析、過去の経緯の説明、渦中の人物についての評価、私を落ち着かせよとする忠言…。そのくせ、年賀状はこちらが送ることはあっても彼からもらった覚えがない。ヘンな人だった。

山口さんが法政を辞められてからは、そうした音信もしばらく途絶えていたが、2013年末、久々にA 4判の封筒に入った重い郵便物が送られてきた。何かと思ひながら開封してみると、中には自ら編集した一編集大好き人間と自称していた『空と風の高原人—信州須坂峰の原高原物語—◎みねのはらペンション村の40年◎』（2013年5月17日発行）と題する立派な記念誌と、各号B 4判1枚の「ペンション村記念館ニュース」が17号から23号まで、ほかに自身が寄稿した「根子岳の人々の会」のニュースレターなど（根子岳は、菅平高原と須坂との間にある2207mの山。前掲著作u参照。）、そして、峰の原高原で撮った（2000年5月）カタクリの美しい花の写真をはがきにしたものなどが、入っていた。はがきには、「いいよ来年あたり、長津田の倉庫（注：旧自宅アパートのこと）を引き払う予定です。（ほぼ25年分の物があふれていて片づける暇が作れない。）長津田には、2ヶ月に1回ぐらい、郵便チェックで行く程度で、つい住まいは川崎です（地震への地盤もよさそうだし）。」と書かれていた。退職後の目標だと言っていた峰の原高原に自前の図書館をこしらえる夢は、完全には成就しなかったのかと思ったが、それでも、川崎と横浜に少し腰を落ち着けて、次の仕事の構想を練ろうとしていたに違いない。まさか、予感でもあったわけではあるまいが、それからまもなく訃報が届いたのだった。後になって気づいたのだが、実際、「ペンション村記念館ニュース」の23号は、刊行日が2014年3月11日（！）となっていた。

上記「根子岳の人々の会」ニュースレター（第30号、2013年11月15日発行）には、山口さんの書いた短い文章が載っている。発行の日付からみて、おそらく彼の絶筆になったのではないかと推察されるので、ここにその全文を掲載しておく。

峰の原高原ペンション村 40周年の思い出と記録 山口 不二雄

峰の原高原ペンション村40周年を前にして、居候団塊老人の記憶も遡る。中央沿線の阿佐ヶ谷に生まれ育った行きがかりか、山と言えば奥多摩からアルプスで信越方面にはご無沙汰であったのに、1972年か73年に菅平に来ている。根子岳は途中で引き返した記憶はあるのだが、正確にいつ、どこに泊まったかは思い出せない。その頃は、長野県企業局による「菅平方式」の峰の原再開発が最盛期であったはずだが、その時は知るよしもなかった。74年1月に長女が生まれて、その年の暮れに峰の原高原のペンション第1号が開業している。40歳なんだ。

峰の原高原に初めて行き、根子岳の頂上をようやく踏んだのは1990年の天皇即位の日である。宿泊はペンションきのこさんで、野生キノコ料理が目当てであり、根子岳登山はほんのついでで、ペンション村についても無関心だったはずである。峰の原高原宿泊は、須坂市出身の大学院生の引きであり、彼女が市役所の丸山久子さんと親しかったことから、その後、須坂市の町並み保存運動と関わりを持つことになる。長く続けた町並み調査の宿泊先は、峰の原高原のペンションだった。

峰の原高原のペンション村が、日本のペンション村のさきがけの一つであることは友人から教えられて初めて知り、92年に峰の原高原、94年に白馬山麓、96年に原村と調査を重ねたが、論文にまとめるには至らなかった。創業時代の勢いが落ち着きを見せる、ペンション業の転換期を迎えているはずである。

野生キノコ、町並み保存運動、ペンション村、そして今は山野草を活かした「花観光」と、一見脈絡のない流

れだが、反近代のカウンターカルチャー地理学の構築（地元の資源や歴史を活用した下からの町おこし）という問題意識は、一貫してきたつもりである。

ペンションの普及が始まった1970年代は、「高度経済成長」の達成で敗戦からの復興が経済的に一段落し、「ドルショック」「オイルショック」や様々なひずみに直面しながら、欧米風の新文化の導入が加速された転換期で、ペンションという宿泊業態も、ヨーロッパに学んで新たに仕掛けられたものである。ディスカバージャパンのキャンペーン、町並み保存運動、スーパーマーケット、ファミリーレストラン、フォークソングブーム、そして原発まで、この時期にルーツを持つものは数多い。

40周年を前に峰の原高原の住民たちがまとめた『空と風の高原人』は、「70年代文化革命」で誕生した地域の類まれな記録として貴重である。

(山崎ペンション・ペンション村記念館)

こうして、峰の原高原への関わりにとにかく一区切りをつけて、彼は逝ったのだった。

学会誌という場をお借りしながら、私的なあれこれに終始してしまったことを、ここに重ねて会員諸氏にお詫びしたい。山口さんにお世話になった卒業生会員の方々とともに、天賦の才能のあまりにも早すぎる死を、心から悼みたいと思う。合掌！

注) 鴨澤巖さんを偲ぶ会編(2004):『おりておりず おりずしておりる—鴨澤巖さん追悼集—』(私家版)に寄稿した、山口不二雄:「人それぞれの鴨澤先生」参照。

[2005年11月案] 人文地理学概論

目次

序 論 人文地理学の課題と展望

第1部 近代地理学の歴史と人文地理学

第1章 学説史への視点

第2章 近代地理学の成立

第1節 近代地理学の前史

第2節 ドイツにおける近代地理学の確立

第3章 近代地理学の展開

第1節 「進化論」と地理学

第2節 ドイツにおける近代地理学の展開

第3節 フランスの人文地理学

第4節 ハーツホーンの地理学方法論

第4章 「立地論」の系譜

第1節 ドイツにおける経済立地論の成立

第2節 経済立地論の展開

第5章 「新しい地理学」の革命

第1節 シェーファーと「新しい地理学」

第2節 「新しい地理学」の方法論

第3節 「新しい地理学」の発展と限界

第6章 現代地理学の諸潮流

第1節 時間地理学の展開

第2節 行動主義地理学の展開

第3節 人文主義地理学の展開

第4節 「ラディカル派地理学」と「マルクス主義地理学」

第5節 日本における「批判的地理学」の系譜

第6節 自然地理学の新展開

第7章 人文地理学の枠組みと方法

第1節 人文地理学の枠組み

第2節 人文地理学とシステム論

第2部 「地域システム」の形成と展開

第1章 現代社会と「地域システム」

第1節 人・物・金・情報の繋がりと「地域システム」

第2節 「地域システム」と地球環境

第2章 自然史の「地域システム」

第1節 自然地理学と「地域システム科学」

第2節 自然地理学における物質循環とスケール
の問題

第3節 自然史の「地域システム」

第3章 伝統社会の「地域システム」

第1節 伝統社会の再評価

第2節 生業と「地域システム」と地球環境

第3節 「むら」と「くに」の地域構造

第4章 資本主義と「地域システム」

第1節 産業革命と資本主義

第2節 産業立地と「広域的地域システム」

第3節 社会空間秩序の再編成

第4節 資本主義と「環境問題」

第5章 近代国民国家と「民族問題」

第1節 近代国民国家の成立

第2節 近代国民国家と「民族問題」

第3節 多民族強制社会への展望

第6章 文化の継承と変容

第1節 文明と文化

第2節 文化の構成

第3節 文化の継承と変容

第3部 人文地理学と現代社会

第1章 現代地理学の研究体系

第1節 現代地理学の研究領域と研究体系

第2節 デスクワークとフィールドワーク

第2章 地誌の再生

第1節 現代における地誌の意義と役割

第2節 地誌と「地域システム」

第3節 地域社会の構造と地誌

第3章 地域調査・地域研究の展望

第1節 現代における地域調査・地域研究の意義

第2節 地域調査・地域研究と「地域システム」

第3節 地域調査・地域研究の動向と展望

第4章 経済地域構造の研究と展望

第1節 現代における経済地域構造論の意義

第2節 経済地域構造論と「地域システム」

第3節 経済地域構造の研究動向と展望

第5章 文化地理学の展望

第1節 現代における文化地理学の意義

第2節 文化地理学と「地域システム」

第3節 文化地理学の研究動向と展望

第6章 地理学と地域政策

第1節 現代における地域政策の意義

第2節 地域政策と「地域システム」と政策原理

第3節 戦後日本における地域政策の展望

第4節 「町おこし」「地域づくり」の地理学の展望

第5節 「環境問題」の地理学の展望

第7章 地理教育の展望

第1節 現代における地理教育の役割

第2節 戦後日本における地理教育の展開

第3節 地理教育の現状と展望

第8章 理論地理学の可能性

第1節 人文地理学における理論地理学の可能性

第2節 「地域システム」の理論

第3節 理論地理学における理論と現実

結 論 思想と教養としての人文地理学